

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月12日現在

機関番号：27101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653074

研究課題名（和文） プロジェクト型教育を通じたメンタルヘルス向上効果と心理教育モデルの構築

研究課題名（英文） Improve effects of mental health through the Project Based Learning and structure of psycho-education model

研究代表者 中島 俊介 (Nakashima Syunsuke)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：80183507

研究成果の概要（和文）：

本研究は、平和・文化的活動を軸にした地域活動が学生およびそれに関わる地域住民のメンタルヘルス向上にどのように寄与するかを検討したものである。プロジェクト型学習と心理教育の視点から解明することを目指した。平和活動の企画を学生自らが企画し地域住民がこれを支援した。その効果を共同体感覚尺度(高坂, 2011)で測定した。さらに参加者の感想文を質的に分析した。その結果、平和活動後に「所属感・信頼感・貢献感」と「平和と人権について理解できたという感覚」の向上が示された。またメンタルヘルスの向上に平和活動の必要性と有効性が議論された。

研究成果の概要（英文）：

This study discusses how a local action, which is based on the peaceful and cultural activity, contributes to the mental health improvement of the students and local people. It aims to elucidate it from the viewpoint of the project based-learning and psycho-education. Students make a plan of the peaceful activity by themselves and local people supported that. It measures the effect with the article “The Community Sense Standard (*kyoudoutaikankakushakudo*)” (Takasaka, 2011). Moreover, it analyzes impressionistic essay of the participant qualitatively. As a result, it shows the improvement of the feeling of belonging, confidence and contribution, and the sense of the understanding about peace and human right after the peaceful activity. Furthermore, it discusses the necessity and effectiveness of the peaceful activity for the improvement of the mental health.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	0	900,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	510,000	3,110,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：プロジェクト型教育 メンタルヘルス 平和・文化的活動 共同体感覚

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象地域の北九州市（小倉）は被爆を3回免れたという稀有な都市である。昭

和20年8月9日、小倉上空に飛来した原爆搭載機は前日の隣接地（八幡）への空爆の黒煙と曇天のため目標を目視できず、3度の旋

回のあと長崎に向かった。しかし長崎でも曇天で目標が見いだせず燃料が切れるため再度の飛来を決定する直前、雲間が一瞬開き、11時02分人類史上2発目の原爆が投下された。もし長崎の雲間が開かなかつたら日を変えて再度小倉は原爆投下の可能性があったといえる。また8月6日ヒロシマが曇っていれば小倉に原爆投下の予定。この一連の事実がどの程度認知されているかの調査は今のところ皆無である、この意味で本研究の成果として学生・地域住民が認知した「可能性としての三度の被爆地小倉」という感覚は「広島・長崎・小倉」としての平和提言地域としての勢力を増すことに貢献できると考えられる。このことによる地域住民のメンタルヘルスの向上（人権・平和意識・共同体感覚の形成）はどれほどのものかと期待できるものである。

2. 研究の目的

本研究は、新しい時代の地域創生を目指して計画された。太鼓演奏という平和・文化的活動を軸にした地域活動が学生及びそれを支援する地域住民のメンタルヘルス向上にどのように寄与するかをPBL(Project Based Learning)学習の視点（主体性の形成）から解明することをねらいとした。また、ストレスの多い現代ではメンタル面での心理教育（psycho-education）が注目されている。そこでさらに本研究では、平和・文化的活動を軸にした「太鼓と平和の灯リレー・プロジェクト」が学習者（学生）および地域住民のメンタルヘルス向上にどのように寄与するかを心理教育の視点からも解明すると同時に、地域に平和・文化的活動についての議論の輪を広げることを最終的な目的とした。

3. 研究の方法

- (1) 活動母体設立；①「太鼓と平和を考える学生連絡協議会」を創設し活動計画の立案と外交折衝を担う。②「小倉祇園太鼓北方キャンパスチーム」を創部し太鼓演技活動の実行面を担当。さらに③「太鼓インターン制度」を創設し小倉祇園祭りでの太鼓演技参加希望大学生を増やし活動を促進。
- (2) 活動連携組織；①北九州市保健福祉局 ②小倉祇園太鼓保存会 ③北九州原爆被害者の会、④鳥栖市役所 ⑤八女市星野村（ヒロシマ原爆の火を採火）⑥長崎市役所
- (3) 活動内容；①「平和太鼓フェスティバル」の実行；8月9日長崎原爆の日小倉勝山公園近接の常盤橋上において4大学の太鼓サークルが集まり、平和太鼓の演技を行う。そのあと原爆投下予定地の勝山公園まで「核兵器廃絶」の横断幕を携えて歩き、核兵器の関心を啓発。地域の人権・平和に関するメンタルヘルス問題の議論のきっかけとする。

けとする。②「長崎街道自転車リレー」の実行；初年度はヒロシマ、次年度からは八女市星野村から採火したヒロシマ原爆の火を「平和の灯」として長崎街道（小倉～長崎220キロ；8月9日～15日）を自転車リレーにて運ぶ。③終戦記念日の8月15日に長崎平和公園の平和像の前で小倉から自転車でリレーしたヒロシマ原爆の火の前に小倉祇園太鼓と創作平和太鼓を披露。平和の火はしょうろう流しにて流す。

(4) 効果の測定尺度；メンタルヘルスの向上効果を測定するためにアドラーの提唱した「共同体感覚」理論に基づく共同体感覚尺度(高坂康雅, 2011)を使った。平和活動と共同体感覚との関連を調査した。

4. 研究成果

(1) 創生された組織と活動の概要

地域全体のメンタルヘルスを向上させるには地域を構成する個人一人一人のメンタルを健康にすることこそが近道であり王道であると考えられる。そしてその原理・法則を学生と地域住民が連携して体験的に学ぶのが本研究の心理教育モデル構築の中心課題である。研究の結果、地域全体の心理社会的な健康度を反映するであろう共同体感覚尺度によってメンタルヘルスの向上する側面を明らかにできた。それは以下の完成年度に集約されるプロジェクト型教育が効果的であったからであると思われる。具体的なプロジェクト実行内容は以下である。

①初年度の設立した平和活動プロジェクト「太鼓と平和を考える学生連絡協議会」会長校；北九州市立大学。副会長校；西日本工業大学。幹事校；日本赤十字九州国際看護大学。九州共立大学。九州女子大学。が3年目になり、活動が洗練され機能を十分に発揮した。特に2012年8月9日（ナガサキ原爆の日）に行われた各大学の太鼓チームの演技（小倉祇園太鼓、沖縄エイサー）の協演は観客も多く（400名）、地域の平和に関する意識発展の向上に貢献した。

②ヒロシマ原爆の火が保存されている（唯一ここのみ）福岡県八女市星ノ村より採火した「平和の灯」をヒロシマに続く原爆投下予定地であった小倉に運び、8月9日のナガサキ原爆の日小倉で毎年行われる北九州市と原爆被害者の会協賛の平和式典に献灯することができた。メディアにて大きく報道された（新聞全国紙3、地方紙2、テレビNHKニュース）。その火を長崎街道の起点である北九州市小倉の常盤橋から自転車リレーで長崎の平和公園まで運び、小倉祇園太鼓の音と共に献灯・献音し地域に核兵器問題をアピールした。

③太鼓文化を主なツールとして展開した1連の文化的平和活動プロジェクトを「平和の

駅」の名称で確立して広範囲な活動の礎を創ることができた。今後学生及び地域住民がこの「平和の駅」活動を行うことでさらなるメンタルヘルスの向上が見込まれる。

(2) 成果と考察

プロジェクトに参加した学生、社会人（大学生 14 人、社会人 4 人）を対象に共同体感覚尺度の変化に関するアンケートを行い回答を求めた。共同体感覚の 3 つの要素「所属感・信頼感」「自己受容」「貢献感」について、5 件法、自由記述で調査を行った。また、この共同体感覚尺度に付け加え以下の 5 つの質問の回答を求めより具体的なものとした。I. 活動している集団やその成員を信頼出来ている感覚。II. 信頼できる集団に所属できている感覚。III. 現在の自分を肯定的に受け入れることができている感覚。IV. 人に対して主体的に貢献することができている感覚。V. 平和や人権について理解できたという感覚。

その結果、活動参加者は活動をしている人への信頼感を増すことが出来、さらに V の「平和や人権について理解できたという感覚」が進んだということが明らかとなった ($z = -3.57$ $p < .01$)。また自由記述の分析から平和活動を行うことによってコミュニケーションスキルの向上が見られるようになったということが明らかになった。また活動体験報告の質的な分析の結果、文化的平和活動を通して、次世代への平和意識、歴史の伝承の重要性に気づくという仮説が支持された。

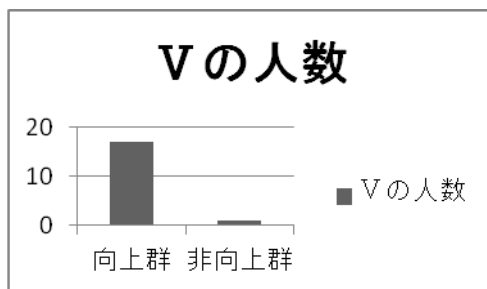


Figure 1 項目 V 「平和や人権について理解できたという感覚」の比較人数

中央教育審議会大学分会の論点として 2012 年の答申に「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」の文言が見られる。我々人間はことばで考えるし学ぶ。従って主体性とは自分の考えがことばで内面に確立されていることである。しかしことばをただ内面化しただけでは行動できない。そのことばが正しく確信できるという情感を伴っている人は主体的に自分の考えを基盤として行動できる。つまり主体性は内面の情動とつながった「ことば」と共に立ち現れるのであ

る。以下はこのプロジェクトの責任者として活動した F 君の感想である。

「私は太平連設立時から 2 年間、会長として多くの活動を行ってきた。全てがゼロからのスタートの中、多くの人々の協力を得て第 1 回学生平和太鼓フェスティバルを迎えた時、私の中に表現しがたい大きな感動のようなものが生まれた事を覚えている。雨に降られ、道に迷いながらも自転車リレー第 1 区間を走り、山間部を抜けて遠賀川へと到着した時に見た美しい夕陽。それを目にした瞬間、私はこの活動が必ず平和へと繋がるものであると強い確信を抱いた。共に手を取り合い苦難を乗り越え事を成し、辿り着いた果てに見た景色を貴く美しいものであると感じた時人の心は一つになる。それこそが平和を成すために必要なものだという事が私のこの活動を通して考えたことである」

ここに見られる素直な「情動とことば」こそ本研究の成果を象徴するものである。プロジェクト型心理教育は大学のキャンパスの外に出ないといけない。自転車で 220 キロの長崎街道を 3 年間走破した。まったくの無事故であったことは奇跡とも言えよう。この 3 年間の学生と社会人との人の和と天の利、科学研究費の支援に大きな感謝と感動をささげるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 福井完児・中島俊介「これからの地域における人の絆やつながりの重要性と積極的平和志向の意義について」北九州市立大学基盤教育センター紀要, 査読無, Vol12, 103-125. 2011
- ② 中島俊介・福井完児「心理教育における平和教育の意義と内容」北九州市立大学基盤教育センター紀要, 査読無, Vol10, 95-118. 2011

[学会発表] (計 2 件)

- ① 中島俊介「太鼓遊びによるコミュニケーションスキル向上プログラムの開発」日本教育心理学会第 53 回総会, 札幌市, 7, 24-26: 24 - J - 07, 2011
- ② 西田順一, 柳 敏晴, 中島俊介, 藤永博, 江口達也, 手島史子, 榮樂洋光, 橋本公雄: 「野外教育によるコミュニケーションスキル獲得の新展開」日本教育心理学会第 53 回総会, 札幌市, 7, 24-26: 608, 2011

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 俊介 (Nakashima Syunsuke)
北九州市立大学・基盤教育センター・教授
研究者番号：80183507

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：